

2023年7月16日 久宝教会 聖霊降臨節第8主日礼拝メッセージ

「たくさん赦してもらったから」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 7章 36-50節

7月も半分が過ぎましたが、本当に雨が多く、蒸し暑い梅雨の季節が続いています。九州の北部地方では連日の大雨で、しかも「記録的豪雨」ということで、各地で土砂崩れなどの災害が起きています。また昨日から、東北の秋田県でも記録的な大雨が降り続けているとのことですので、不安の中に過ごされている方々が守られますように、またこれ以上の被害が出ませんようにとお祈りしています。

大雨が去った後の地域では、家屋に流れ込んだ土砂を掻き出したり、壊れた家財道具を運び出したり、倒れた木を切ったり、様々な作業のために県外からも連日、たくさんの人たちが被災地にボランティアとしてやって来られて、暑い中、頑張っておられると報じられていました。毎年のように全国各地で、災害が起こっていますが、災害が起こるたびに、行政による支援が届くよりも早く、まずボランティアの方々が、草の根の活動として、それぞれのお宅に伺ってお手伝いをされるという光景が見られています。ですが、ボランティアに行かれる方々は、どうしてそのように自分の時間を使って、ボランティアに行かれるのでしょうか。

もちろん、それぞれの方に聞いてみると、様々な理由があるのだらうと思いますが、きっと多くの方は、「被災して困っている人たちを、放っておけない、見過ごせないと感じた」と答えられるのではないかと思います。また、他にも「自分も以前に、他人から助けってもらったことがあるから」と答えられる方もいるのではないかと思います。いわゆる「恩返し」と言いますか、「持ちつ持たれつ」や「お陰様」という考え方もあるのではないのでしょうか。

自分の家が被災し、それを誰かに助けってもらったという経験のある人は、あまり多くないかもしれませんが、もっと広く考えてみますと、誰のお世話にもならないで、誰にも助けってもらうことなしに、自分一人だけで生きている人、これまで生きて来た人という人は、誰一人としていないはずで、多かれ少なかれ、周りの人たちと関わり合いながら、日々の暮らしを送っていますし、そもそも天候にしても季節にしても、様々な収穫物、自然の恵みにしても、自分の思いや行動を越えたものによって、与えられ、支えられていることがたくさんある、ということについては、多くの人々が納得されるのではないのでしょうか。そのように考えると、「お陰様」という考え方

には、多くの人が共感されるのではないかと思います。

さて、今回の聖書のお話は、聖書協会共同訳では「罪深い女を赦す」という小見出しが付けられているお話でした。ある食事の席で、一人の女性がイエス様の足を自分の髪の毛で拭い、香油を塗ったことに対して、周りの人はその女性を非難したけれども、イエス様はその女性を高く評価したというお話です。このお話は、登場人物の名前や場面設定などに、少しずつ違いがあるものの、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つの福音書全部に書かれているお話です。イエス様がある町にいた時、その町に住むシモンという名のファリサイ派の人が、イエス様を食事に招待しました。そしてイエス様がシモンの家で食卓に着いていた時に、一人の罪深い女性が足元にやって来て、自分の髪の毛でイエス様の足を拭って、香油を塗ったというお話です。

ですが、このお話の中には不思議な点がいくつもあります。まず 37 節には「この町に一人の罪深い女がいた」とありますが、そもそもどの人が罪深いか、罪深くないかなど、どうやって分かったのでしょうか。ギリシャ語の元々の文章では「町で『罪のある女』がいた」ですから、恐らくこの女性は、この町で有名な「罪ある女性」として、よく顔の知られた存在だったのだと思われます。また、そもそも罪のある無しというのは、いわゆる穢れているか、穢れていないか、清いか清くないか、ということとして理解されていましたし、それは神殿にお詣りして、律法で定められている通りに献げ物、お供えをして、儀式をすれば、清められると考えられていました。ですから、お金のある人は定期的に神殿にお詣りに行き、贖罪の犠牲の儀式、お清めを出来ましたが、この女性のように貧しい人たちには、それが出来ませんでした。ですから、宗教祭儀的にも、この女性は穢れている、罪があるということが、目に見えていたのかもしれませんが。

ファリサイ派のシモンの家で、イエス様が食事の席に着いていた時、この女性もその場にやって来て、イエス様の背後からその足を拭い始めたというのも、不思議です。シモンの家はなぜ、そんなにもオープンだったのでしょうか。シモンから見て、この女性が有名な「罪深い女性」だったのであれば、そのような人に自分の家に入って来てもらっては困る。「自分の家が穢れてしまうから入って来るな」と言って、門前払いをしても良さそうなものです。にもかかわらず、室内まで通して、女性

のするがままにさせていたのは、イエス様がこの女性にどのように応対するかを見るためだったのかもしれませんが。つまり、イエス様を食事に誘ったのも、初めからイエス様の粗探しをするため、訴える口実を探すためだったのかもしれませんが。

乾燥する気候のパレスチナでは、人々はサンダルを履いていましたので、足は常に砂埃で汚れていました。家にあがる時、食卓に着く時には、その足を洗う水を用意するというのは、食事前に手を洗うのと同じように衛生的な目的というだけではなく、お客さんを歓迎・歓待するという意味も込められていました。また食事をより楽しむために、香油を塗るということもあったようです。そのような文化的背景の中で、この女性のイエス様への香油塗りがありました。

罪人に触れたり、関わったりすると、その相手から穢れ、不浄が移って、自分までも穢れてしまう、と厳しく考えられていた時代に、シモンは心の中で思いました。「この人がもし預言者なら、自分に触れている女が誰で、どんな素性の者か分かるはずだ。罪深い女なのに」(39)。そんなシモンに対して、イエス様は借金を帳消しにしてもらった二人の負債者の話をしました。一人は 500 デナリオンですから数百万円の借金をしていて、もう一人は 50 デナリオンですから数十万円の借金をしてたという設定です。二人ともお金を返すことが出来なくなってしまいましたが、金貸しは二人の借金を帳消しにしてくれました。さて、どちらの方が金貸しに対する感謝が大きいでしょうか、という問題でした(41-42)。シモンは答えました「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」(43)。「あなたの判断は正しい」。

それから、イエス様は続けられました。「私があなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この人は涙で私の足をぬらし、髪の毛で拭ってくれた。あなたは私に(挨拶の)接吻もしてくれなかったが、この人は私が入ったときから、私の足に接吻してやまなかった。あなたは頭に油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた」(44-46)。つまり、シモンは何もしてくれなかった一方で、この女性はイエス様に自分に出来る様々な事を一生懸命にしてくれた。そこにこの女性の感謝の気持ちが、自然とあふれ出ているじゃないか、ということです。

さらに言われました。「この人が多くの罪を赦されたことは、私に示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」(47)。言い換えれ

ば、この女性は多くの罪を犯し続けて来ていたかもしれないが、赦されていること、帳消しにされていることも多い故に、たくさんの感謝を示してくれた。一方でシモンは罪を犯したことは少ないかもしれないが、その分、感謝の気持ち、歓迎の気持ちとしてイエス様に態度で示すことも少なかった、ということでしょう。ここで「赦す」と訳されている言葉「アフィエーミ」の元々の意味は、借金を「帳消しにする」という意味ではなく、「そのまま行かせる」という意味です。またここでは「赦された」と一見過去形のように訳されていますが、正しくは完了形ですから、「もう既に『赦されている』」「そのまま行って大丈夫だよ」と訳す方が適切です。

この女性がイエス様に最大限の愛を示した、感謝の行為をしたから、その結果として罪を赦してもらった、借金を免除してもらったのではなく、先にもう既にたくさん赦してもらっていると感じられたからこそ、イエス様に対して感謝の気持ちで応じることが出来たのではないかと思います。だからこそ 50 節の最後の言葉「あなたの信頼があなたをすでに救っている。安心して行きなさい」につながっているのだと思います。周りの人から見ても、「あの人は罪深い人だね」と後ろ指を指され続けていたこの女性は、自分自身のことをどのように受け止め、理解していたでしょうか。きっと人から言われる以上に、自分自身のことが嫌いで、憎くて、情けなかったのではないかと想像します。しかし、イエス様が行く先々で、苦しんでいる人たちに、「大丈夫。あなたもそのまま、価値のある存在、価値のある命ですよ」と宣言され、声をかけられ続けているのを伝え聞き、彼女自身も救われた思いがした。だからこそ、いても立ってもいられなくなって、イエス様を訪ねてシモンの家にまで来たのではないかと思います。

一方で、律法を厳密に守ろうと躍起になっていたシモンは、これまでも自分で何とかしてきたし、これからも何とかしていこうと思うあまりに、自分がたくさん赦してもらっているということに気が付くことが出来なかったのだらうと思います。私たちは日々多くの恵みを頂き、たくさん赦してもらっているからこそ、謙虚に神様に感謝したり、隣の人を大切にしたりすることが出来るのだと思います。自分の力では人を大切にすることなんて覚束ない私たちですが、そんな私たちが今日も命を与えられて、生かされているということ、それ自体がたくさんの赦し、たくさんの恵みであることを心に留めて、安心の内に、また一日の歩みを進めて参ります。